作成（2024 年度）

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	中山哲士
所属機関名	工学部　建築学科
職位	准教授
在籍年	14 年

教育の責任

私は工学部建築学科に所属して、建築環境・設備学に関する専門科目をはじめ、卒業研究の指導を行っている。講義では「建築環境工学Ⅰ・Ⅱ」、「建築環境設計演習」、「環境工学演習」の他、1 年時の「情報リテラシー」の講義も担当している。学科では学科の教務担当を行っており、学科全体のカリキュラムの調整、学部生・院生の特別研究発表会の調整等を行っている。

教育の理念

建築という分野は実学の分野であり、経験がものをいう世界でもある。いかに建築や都市、文化に興味をもち、知識を広げるかが重要である。また、建築は他の工業製品とは違い、一品生産であることから、その土地の歴史は文化、風土を読み取ることも重要である。その実現のための「知識」を得ることは、時に極めて有効な手段であり、武器となりうる。講義では知識は暗記することより、必要になったときに思い出して調べることが出来るようになることを目標にしており、そのためには、いかにその引き出しを多く持ち、導き出す手段を知っていることが社会の現場では必要であると考えている。

一方で、興味のあることは自然に身につくと思うので、専門である建築を「好きになること」「興味をもつこと」を念頭に教育を考えており、そのために、自分自身の体験談や訪れた街、建築などの写真などを交えて紹介しながら、多くの学生に興味を持ってもらうことを念頭に講義を行っている。

学生自身がいろいろなことに興味を持ち、自発的に解決する手法を考えられる人材になるように手助けすることを教育の理念としている。

教育の方法・方針

上記の建築の理念に基づき、講義では暗記することより、知識の引き出しを多く持ち、引き出す能力を身に着けることを目標に教育を行っている。そのため、講義の評価試験では「手書きメモ（A4、1 枚）」の持ち込みを許可している。手書きのメモは単に資料や教科書のコピーではなく、手を動かして半期の講義の内容を限られた紙面に要約することで改めて講義で学んだ内容を理解するのに有効な手法だと思われる。

「建築環境工学Ⅰ・Ⅱ」では座学が中心であるが、毎回の理解度を確認するために、授業の終わりに小テストを mylog を利用して実施して理解の習熟度の把握に活用している。また、講義で使用する資料は重要箇所が穴あきになっているプリントを配布し、講義のパワーポイントを見ながら該当箇所を埋めることで、重要個所の振り返りがしやすいように工夫している。

「建築環境設計演習」など、計算が多くなる演習系の講義ではなるべく黒板に計算過程を板

書しながら、講義で学生と同時に共有しながら実践するようにしている。これにより、具体的な思考の過程を理解しやすいものと思われる。

「特別研究（卒業論文）」は各自の疑問とそのための解決策の提案を自ら導き出すようにテーマを決めている。そのためにゼミ活動を通して何度も話し合いを重ね、人の意見も聞き、議論することで、まとめあげる過程を重視している。教育では各自で修得していく過程を重要視して教育を行っている。

教育の成果

授業評価において、例えば 2024 年度の秋学期の 1 年生対象の「建築環境工学Ⅰ」では、82%の学生が「宿題など与えられた課題に積極的に取り組ん」でおり、86%の学生が「この分野への理解が深まった」、また 92%の学生が総合的にこの講義に「満足」「ほぼ満足」と回答しており、講義を通して関心と理解を深めたと思われる。自由意見でもほぼ同様の意見が見られた。

特別研究においては、自身の探求につながる研究活動を通して、物事の問題点をとらえる力、解決する方法の提案能力を身に着けることができた。

ゼミの卒業生はほぼ全員が建築関連企業、または建築設備関連企業に就職しており、これまでも多くの活動報告を受けているが、今後もこの分野で力を発揮してくれるものと期待している。

今後の目標

講義ではおおむね好評な評価を得ているが、これに満足せず、少数意見にも耳を傾け講義内容を日々研鑽する必要がある。

また、建築環境工学・設備学の技術は日々進歩しており、自分自身も常に学会活動やメディアなどを通して、常にアンテナを巡らせておく必要がある。これを講義でもフィードバックしていく。

教員自らが楽しく学び続ける姿勢を学生に示し続けられるようにしていきたい。

根拠資料

・2024 年度　授業アンケート結果